

大久保春乃(青葉学園短大)

目的 1900(明治33)年、短歌の世界に革新の風を吹き込んだのが、新詩社の機関誌『明星』の創刊であった。そこで活躍を開始した女流歌人は、当時いずれも20歳台前半の若さであり、自由で新しい歌風は、歌壇・文壇のみならず、一般子女に喝采をもって受け入れられた。彼女達が好んだ歌材として、服飾は重要な位置を占めている。本論では、20世紀初頭の女流歌人の服飾観と、それが培われた背景を明らかにすることを目的とした。

方法 主な歌人として、与謝野(鳳)晶子・茅野(増田)雅子・山川登美子の3人に着目した。晶子の処女歌集『みだれ髪』1901年から3人の共著の『恋衣』1904年を経て、雅子の最終歌集『金沙集』1917年に至るまでに刊行された歌集、随想集の他、当時の雑誌に掲載された歌および文章、写真等を資料として用いた。

結果 『みだれ髪』では、全 399首中約79語の服飾用語が用いられている。31音という制約の中であえて選択された用語には作者の格別な想いがこめられている。これらの用語は主に、幼児期の回想・女性の若さの象徴・恋愛の小道具といった役割を担って登場する。

生涯歌人として活躍した晶子は、幼い頃男装で育てられた経験を持つ商家の娘で、12歳頃から古典文学に親しむ中で、王朝風で絢爛な装いの好みを育てている。他の2人は、共に日本女子大学校に学んだが、登美子は29歳で没し、雅子は同校教授として研究の道を歩んでいる。服飾観の形成は、こうした各歌人の境遇に依るところが大きいと思われる。

森鷗外は『恋衣』を批判し「娘っ子やおかみさん」の歌集であるとしているが、文学者であると同時に一般子女でもある彼女達の歌にこそ、服飾史的価値が存在するのである。